
東方戯言記

青蒼 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方戯言記

【Nコード】

N0225M

【作者名】

青蒼 藍

【あらすじ】

暇で暇でたまらなかった八雲紫が戯言シリーズの世界の人間たちを次々と幻想入り。

幻想郷の人々（妖怪達）と戯言シリーズの人々はどうかわっているのか?????

序章 原因

「ああ、なにか面白いことは無いかしら」

最近は幻想郷では何も起きなくてつまらない。

「別にいいじゃないですか。それに暇なら結界のほうをしてみてください。紫様」

「それは藍がやっているからいいじゃない。ああ、何処かに面白いことないかな」

なんかないかな。

「全くだらけていないで、しっかりしてください」

そう言つと藍は家事をしに家の中に消えていった。

藍も行っちゃったから暇なのにさらに暇になっちゃった。

「なんか適当な人間達でも幻想郷に招いてみますか」

これで少しは退屈じゃなくなるといいんだけど。

お知らせ

この小説についての説明

舞台：幻想郷各所

登場人物：東方キャラ、戯言キャラ、人間キャラすべて

基本は戯言のキャラが幻想入りする話です。

そこで読者のみなさまに希望を取りたいと思います。

戯言のキャラ・人間のキャラを幻想郷の誰の所に落として欲しいですか？

例

いーちゃん×霊夢 - 博麗神社 ほのぼの

哀川潤×レミリア - 紅魔館 バトル

玖渚友×霧雨魔理沙 - 森（冒険）

など

このような感じに書いてくれればそれを小説にします。

戯言キャラ or 人間キャラ x 東方キャラ・場所（内容）を書いてコメントしてくればいいです。

たとえ原作で死んでしまったキャラでもオkです。

でも、名前しか出てこないキャラはやめてください。

かけないので。

それだはたくさん希望が来ることを祈って

お知らせ（後書き）

もしも希望が無かったら、作者が勝手に考えます。

一樣、次の更新は7月1日です

アンケート

今日までにきたリクエストと作者が考えた組み合わせと発表します。
まだ決まっていらないところは「？」で表示しますので希望があれば
感想に書いてください。

あとリクエストは随時受け付けているのでどんどん書いてください。

それでは発表です

戯言シリーズキャラ		東方キャラ	内容
1：	いーちゃん	八雲紫	胡
散臭さ対決			
2：	零崎曲識	プリズムリバー3姉妹	ほ
のぼの			
3：	いーちゃん	小町or映姫	
問答合戦			
4：	零崎？	小町or映姫	
問答合戦			
5：	石丸小唄	霧雨魔理沙	泥棒

6 : 浅野みいこ
勝負

魂魄妖夢

剣

7 : 佐代野弥生
食事

西行幽々子

8 : 右下るれろ
?

アリス・マーガトロイド

「

9 : 哀川潤

風見幽香

勝負

10 : 絵本園樹

八意永琳

病院

11 : 千賀ひかり
のぼの

八雲藍

ほ

12 : 紫木一姫
?

ルーミア

「

13 : 萩原子菰
?

「？」

「

14 : 闇口崩子
?

十六夜咲夜

「

15 : 零崎軋識
?

チルノ

「

16 : 玖渚友
?

上白沢慧音

「

17：想影真心
のぼの

博麗霊夢

ほ

18：西東天
？
」

八雲紫

」

19：葵井巫女子
のぼの

東風谷早苗

ほ

20：西条玉藻
「？
」

フランドール・スカーレット

以上20個が暫定です。

アンケート（後書き）

名前打つの疲れた。

漢字難しすぎ。

1幕 欠陥製品と大妖怪 - 1 - (前書き)

正直かなり書くのが怖いですけど頑張って続けて生きたいと思います。

どうか、読んでみて下さい

1幕 欠陥製品と大妖怪 - 1 -

0

幻想？

現実？

両方と同じものだろ。

1

「ここは何処だ？」

確か、戯言遣いことぼくはいつもの通りアパートの自室で七々見から借りた本を暇をつぶすために読んでいた。

そして、気がつくところに居た。

「僕には夢遊病では無いと思うのだが」

ここは何処なんだろ。どこかの家である事には間違いない。

今、僕が居るのはどこかの家で今までは布団に寝かされていた。

「あら、起きたのね」

そこには妖艶な女性が居た。

「あなたは誰ですか」

「私は八雲紫ごく普通の妖怪よ」

「紫さんですか」

ぼくの反応に驚いたのか目を丸くしていた

「私は人間じゃなくて妖怪だけど驚かないの？」

「いえ、驚いていますよ。ただその驚きが顔に出ないだけです。それにしても妖怪って本当ですか？」

確かに驚いている。

でも、なんとなくだがそんな感じが。哀川さんや真心に通じる何か

「ふーん。そうまあ良いわ。最近暇してたのよ。あなたは中々面白そうだわ」

嫌な予感はある。

まるで、哀川さんにいじめられる直前みたいな気がする。

「あー。紫さん、ちょっと聞きたいことあるんですけど良いですか」

「良いわよ。なんでも聞いて頂戴。でも、あなたが一方的に質問し

て私が答えるだけではつまらないからここは互いに質問し答え合いましょ」

なんだか兎吊木と話した時を思い出す。余り思い出したくないが。

「分かりました。それでいいです。じゃあぼくから質問するけどいいですか？」

紫さんは笑いながらこちらを見ていた。

「駄目よ。だってあなたさっき私の名前聞いたじゃない。だから次は私の番よ」

さっきのも入っているのかよ。無性に突っ込みたかった。

「それじゃあ。どうぞ。でも紫さんがぼくに聞きたいことがあるんですか？」

「あるわよ。たくさんは無いけど。それではまずあなたの名前でも教えてもらおうかしら」

「それは無理です。ぼくは自分の名前を他人に教えない主義ですから」

「そう変わった主義ね。まあいいわ。だったら他の人はあなたのことをなんて呼んでいるのかしら」

「いっくん。いー兄。いーの。いーいー。いのすけ。いっきー。いの字。いーたん。戯言遣い。詐欺師。」

「なかなか色々あるわね。じゃあ私はいつくんと呼ばせてもらおう」

「お好きにどうぞ。じゃあぼくからの質問ですね。ここは何処ですか」

「私の家よ。それだけなら。次は私の番ね。あなたは妖怪のことはどう思う?」

「妖怪ですか。それあなたのことはどう思っつてことですか?」

「一般的に言う妖怪のことで、私のことじゃないわよ。心配しなくてもあなたが私のことが好きなのは言葉にしなくてもちゃんと私に伝わっているわ」

この女はいや妖怪に性別はあるのか?どっちにしても人をからかって遊んでいやがる。

「別に特になんとも思いませんよ。妖怪なんて所詮はまやかして宇宙人と大して変わらないと思っっていますからね。たとえば、自称妖怪がぼくの前に現れてもそれは変わりません」

「それはつまり私のことも実は頭の可笑しくなった電波女とでも言うのかしら」

「そこまではいいませんよ」

「そう。まあいいわ。あなたの番よ」

「何でぼくはあなたの家にいるのですか?」

これが一番ぼくが聞きたかったことだ。

自分が何処にいるのかよりもなぜいるかのほうが重要である。

「本当はそっちのほうが先に聞きたかったんですよ。簡単なことよ私があなを連れてきたからよ」

「なんでですか」

「あらあら、いっくん。今度の順番は私の番よ。それともこの程度のことです混乱しちゃったのかしら」

しまった。思わず先を聞きたい一心でやってしまった。

まだ素性も良く分からない相手の前で冷静さを欠いてしまつて駄目だ。

「すみませんでした」

「別にいいわよ。気にしてないから」

そう言いながらも八雲紫は勝ち誇つた笑みを浮かべてこちらを見ていた。

1幕 欠陥製品と大妖怪 - 1 - (後書き)

何とか書けました。

感想を求めます

2幕 一少女趣味へボトルキープと騒霊三姉妹 - 1 - (前書き)

前回は一話完結でしたが今回は三部か二部構成になります

2幕 一少女趣味へボトルキープと騒霊三姉妹 - 1 -

- 0 -

音を奏でることと音楽を奏でることの差は騒音と好音ぐらいの差がある

- 1 -

「お姉ちゃんなんか人が倒れているよ」

私、メルランはお姉ちゃんであるルナサと一緒に今度やる演奏会の会場の下見に行った帰りだった。

その道中折り目正しい燕尾服を着た男が倒れていた。

「とりあえず。息もしてるし、心臓も動いているから死んではないな
いみたい」

ルナサ姉は男の人口の辺りに手を近づけたり、胸に手を当てて確認していた。

「でも、ここに置いて行ったりしたり妖怪に食べられちゃうよ」

「はあ、遠まわしに連れて行こうっていいたいの？」

「さすが、お姉ちゃんちゃんと分かっているー」

ルナサ姉は溜息をつきながらも倒れている男の左側に回り、肩に手を回した。

「あなたもぼさつと見てないで逆側を持って」

「はいー」

私も男の人の肩を担いで三人で廃洋館に帰って行った。

「う、ここは何処だ」

僕は気がつくとも見知らぬ家の見知らぬベットに寝かされていた。

確か、僕はいつも通り自分のピアノバーで演奏していたはずだ。

ここは僕が知っているところではない。

「でも、この家の雰囲気は悪くない」

なぜだが分からないがこの家には僕にとってとても居心地が良かった。

とりあえず。誰だかわからないがここに僕を運んでくれた者に感謝しよう。

すこし、この家を見て回ろうと思い、ベットから起きて部屋を出た。

扉から出て階段を下りる。

一階のフロアに出るとそこには大きなピアノが置いてあった。

「なぜこんな所にピアノがあるんだ。だが悪くはない」

僕はピアノを軽く引いてみた。

「随分古いものだが調律も手入れも完璧だ」

ここまで、見事なピアノを見たのは初めてだ。

そして、ピアノの椅子を引きその椅子に座り、僕はピアノを弾き始めた。

「誰かがピアノを弾いてる」

「「えっ」「」

ルナサ姉が言った一言に私とリリカは驚いた。

そして、よく耳を澄ますと確かにピアノの音が聞こえる。

それもとつても上手な音が。

「ねえ、行つて見ようよ」

リリカがそう提案した。

「そうね」「そうだね」

私たち三人は一緒にフロアに行った。

そこにはさっきこの家に運び込んだ男がとても見事な演奏を奏でていた。

2幕 一少女趣味へボトルキープと騒霊三姉妹 - 1 - (後書き)

書くのが結構大変です。

なんか毎回後書きに愚痴を書いてる気がします。

でも本当にクロスオーバーの小説って大変ですね。

他の作者の皆さんとてもすごいと思います。

2幕 少女趣味へボトルキープと騒霊三姉妹 - 2 - (前書き)

更新が不定期になってしまつて申し訳ない。

でも、できるだけちよくちよく更新したいと思います。

2幕 少女趣味へボトルキープと騒霊三姉妹 - 2 -

- 2 -

ピアノを弾き終わると近くには三人の少女が立っていた。

「勝手に弾いてしまつてすまない。しかしこんな見事なピアノを見たらつい弾いてみたくなつてしまつた」

「別にいいわよ。確かに下手な演奏をされたら迷惑だけどあなたの演奏はそのとっても上手だったから」

三人の少女の中でバイオリンを持った金髪の少女が答えた。

「そうか。ありがとう。それで少し聞きたいことがあるんだけど」

「それじゃあ。リビングに行こう。お兄さん名前は？」

今度はトランペットを持った水色の髪の少女が聞いてきた。

「僕の名前は零崎曲識。君たちは？」

「私たちはプリズムリバー三姉妹。音楽家だよ」

今度は何も楽器を持っていない茶髪の少女が答えた。

「それじゃあ。自己紹介も済んだところでリビングに行きましょうか」

最初に答えた金髪の少女が言う。

それに僕も残りの2人の少女も従い付いて行く。

「つまりここは僕たちの世界には変わらないが普通は絶対に行き来することが出来ない世界それがこの幻想郷であると」

「そうです。たぶん曲識さんは八雲紫によってこの世界に幻想入りさせられたのだと思います」

リビングに場所を移しこの世界のことを聞くと金髪の少女ルナサが説明してくれた。

「そうか。なかなか悪くない」

僕が説明されたことを納得していると水色の髪をした少女メルランが尋ねてきた。

「ねえ。曲識さんは何の楽器が得意なの。やっぱりピアノ？ さっきはとっても上手かったもんねー！！」

「いや、楽器全般ならどんなの物でも弾けるし、叩けるし、吹ける」
そう言うとメルランの目がさらに輝きを増す。

「スゴーイ！！！！ どんな楽器も使えるなんて本当に人間？！！」

「メルランはしゃぎすぎよ。まあ確かに私たちでもすべての楽器を扱えるわけじゃないからすごいわね」

騒いでるメルランを姉のルナサが嗜める。

そんな微笑ましい光景を見ていると殺人衝動が湧いてくるが僕はそれを押さえ込む。

確かに彼女達は僕の条件を満たすがそもそも彼女達は人間ではない。

元人間の現幽霊である。

彼女達からこの世界のことを聞いたとき彼女は自分達が人間ではないことも教えてくれた。

殺人鬼とは人を殺す鬼だ。

幽霊を殺す、すなわちそれは魂を刈るそれは石風の仕事だ。

ゆえに彼女達は殺さない。

「どうしたの曲識さん。急に黙ってしまったってそんなにメルランが五月蠅かったのかしら。だったら謝るわ」

「いや、そんなことは無い。全然まったく悪くない」

「そうですか。だったらいいですけど」

ルナサは胸を撫で下ろしたようだ。

「ねえ、曲識さん。行くところないんですよ。だったら家に居ていいよ」

メルランがそう提案するとルナサと茶髪の少女リリカも言った。

「そうね。曲識さんが良ければいいですよ」

「私はいいわよ」

僕は少し悩んだものの行く当ても無いので

「すまない。厄介になる」

と言い切ったときリリカが

「ねえ、曲識さん。私たちと一緒に演奏会に出ない？」

2幕 少女趣味へボトルキープと騒霊三姉妹 - 2 - (後書き)

リリカが最後が最後になるまで殆ど空気でした。

満遍なくキャラを出したいんですけど、どうも三人の口調の違いが上手く表せませんでした。

本当に小説を書くのって大変ですね。

さて、曲識編。

次でラストかも？

2幕 少女趣味と騒靈三姉妹・3 (前書き)

4か月以上も放置してしまつてすいません

今後はこんな事にならないように努力していきたいです。

それでは曲識と三姉妹の最後のお話を楽しんでください。

2幕 少女趣味と騒靈三姉妹 - 3

- 3 -

「演奏会？」

「そう演奏会。曲識ほどの腕前なら私たちと一緒に演奏会に出て見ない？」

リリカはそう言い他の二人も賛同するように声を上げる。

「それはいいね！！！！ 曲識さん、一緒に演奏しようよ！！！！」

「確かに曲識さんさえ迷惑でなければ私たちと一緒に演奏会に出てくれないかしら？」

「それはいいが、僕みたいな者がいきなり急に出てもいいものなのか？」

演奏会に出ること自体は全く嫌ではない。

むしろ演奏を大勢の人に聞かせること楽器を演奏する者にとって喜ばしい事ですしかない。

しかし、その演奏会に来る者たちは皆彼女たちの演奏を聞きに来るのであって、その中で僕のような者が弾いてもよいのだろうか。

「そんな事を気にしているの？」

僕の言った事に対して、ルナサは呆れたように言い、そして続ける。

「安心して下さいよ。演奏会に来る人間は皆楽しく聞ければいいんですよ。それに毎回毎回同じ者の演奏を聞いても飽きるに決まっているじゃないですか。だから、あなたのような新要素が必要なんですよ」

「そうだよ。曲識さんが演奏してくれたら私たちだけじゃなくてもお客さんも喜ぶよ」

「何を心配しているのか知らないけど、あなたの演奏ならどんな人間でも満足させられると信じられるから演奏会に誘ったのよ」

ルナサに続き、メルランとリリカにも言われた。

ここまで言われてしまった以上僕は演奏会に参加することを了承した。

「僕でよければ、君たちの演奏会に参加させてくれないか？」

「もちろんよ」「いいに決まってるわ!!」「お願いするわ」

三人の同意を得て、僕らは一週間後に演奏会を行うことになった。

「曲識さん、準備はできてる？」

「ああ、何時でも平気だ」

いよいよ、演奏会の開始直前。

この一週間は殆んど彼女たちと一緒に練習をしてきた。

「それじゃあ、観客の皆さんに楽しんでもらいましょう」

そう言いながらルナサは舞台に出て行く、それに続くようにメルラ
ンとリリカも舞台に出て行く。

三人が出て行き、一曲目の曲が始まる。

僕が出るのは三曲目から、それまで少しだけ時間がある。

三人の演奏をゆっくりと聞こうと思っていたが、どうやら無理らしい。

「出てきたら、どうだ？ さっきからこそそと隠れているみたい
だけ何だい？」

そう言うつと舌打ちをして、後ろから男が出てきた。

「ここは関係者以外は立ち入り禁止だ。帰った方がいい」

「そう言うあんたは何者なんだよ。ここは関係者以外立ち入り禁止
なんだからだったらあんたこそ出て行くべきじゃないか」

「僕は関係者だ。この後彼女たちと一緒に演奏する者だ。さあ、僕
は説明したぞ。君は一体何をしにこんな所に来たんだ？」

男は怒ったような口調になり声を荒げて言ってきた。

「俺はなあ最近この幻想郷入りした演奏家なんだよ。この世界で演奏してやろうと思ったたらこいつら居るから俺の演奏を誰も聞こうとしねえんだよ。だから、この演奏会もぶっこしてやろうと思ったんだよ！！！」

「それで君たちは何をする気なんだ？」

「さっきまではここらにある楽器を壊そうと思ったけど気が変わったぜ。あんたをボコボコにさせてもらうぜ。共演者がボロボロになったとなれば演奏会も潰れるしな、それにさっきからてめえの話し方が気に食わねえんだよ！！　だから、悪いけどあんたボコボコにさせてもらうぜ」

「君は他の人に演奏を聞いて欲しいと思う気持ちは悪くない。ああ、悪くない。だがそれだけで演奏家と自称する君は楽器を傷つけようとした。それは音楽家として見逃せることじゃない。だから、君たちを殺そうと思ったんだが、残念なことに君は条件を満たしていない。だから、殺すのは我慢してやろう」

「何を意味の分かんねえ事を言ってるんだ？　いい加減うつせんだよ！！！！」

「無駄な事は止めるんだな。君はもう動けない」

「あがつ！！！！！！」

「僕は音楽家でもあり音使いの殺人鬼。君たちは僕の声を聞きすぎた。もうその身体は僕の思いのままだ。さっさと気絶しろ。本当は殺したいんだが、僕は少女趣味零崎曲識。ポトルキープ少女以外は殺さない」

男はそのまま地面に倒れ込み動かなくなった。

「曲識さん。 出番ですよ？ そんな所に居ないで早くしてください」

「ああ、ルナサ。 今行こう。 君たちとの演奏は悪くないからな」

そう言い、ルナサと共に演奏会に出て行く。

彼女たちとの共演に胸を膨らませながら。

2幕 少女趣味と騒霊三姉妹・3 （後書き）

次回は澄百合学園の面々×紅魔館面々です。

今度はあまりお待たせしないようにしたいです。

感想ややって欲しいクロスオーバーが在ったらどんどん言ってください。

作者の実力で書けるものなら頑張って書きますのでよろしくお願いします。

3幕 「策士とメイド」(前書き)

今回は早く更新出来たぜ!!

3幕 「策士とメイド」

- 0 -

化け物と人間の違いは考えることである。

すなわち考えない人間と化け物は同じである。

- 1 -

まったくここは何処からしら？

気が付いたらここに居たなんて台詞を私が言うことになるうとは思
いもよらなかつたわ。

「本当にここは何処なのよ」

とりあえず状況を整理して今の状況に一番適した策を考えなくては。
何時も通り澄百合学園の寮の自室で寝たはずなのに気が付いたら森
の中に居た。

「昨日は疲れていて、制服のまま寝てしまったから服が寝間着で無
いのはいいけど。とりあえず人家でも探すべきかしら？」

今、私が行える最善の策は現状の状況の確認のための情報収集を行
うこと。

この明らかに電子機器の類が全く使えない空間において、情報を得る為には人家を探すしかない。

「でも、何処に行けば人家があるのか全く見当もつかないわ」

闇雲に歩き回るのは柄じゃないけど仕方がないわね。

しょうがないけど私は闇雲に当てもなく歩き始めた。

「とっても趣味の悪い屋敷ね」

一時間以上かかってようやく見つけた屋敷はとても豪華な洋館だったけど、何もかもが紅かった。

「文句ばかり言っても始まらないわね。とりあえず、これだけ大きな屋敷なら門から入るのかしら？」

塀に沿って歩いていけば門に辿り着くでしょう。

そのまま再度歩き始めると門はすぐに早く見えてきた。

其処には門番らしい女性も佇んでいたので頼んで中に入れてもらうことにした。

「すみません、私道に迷ってしまったんですけど、ここが何処だか教えてくれませんか？」

返事が無い。この距離で聞こえないわけがない。

無視されているのかと思ったがよく耳を澄ませてみると寝息が聞こえてきた。

「立ったまま寝るなんて器用な人ですね。起こすのも悪いですし、勝手に中に入れていただきましょう」

一応寝ている門番に一声かけてから、門の中に入っていく。

ちゃんと手入れされた庭を横目で見ながら真っ赤な屋敷の扉をノックした。

コンコン。

軽い音が響き渡る。

そして、ノックをしてすぐに扉は開いた。

「このような時間にどちら様ですか？」

出てきた人は銀色の髪にメイド服という奇っ怪な格好をしていたが、醸し出している雰囲気は殺し名や呪い名の連中と同じものだった。

この女はヤバイ。

出来るなら関わりたくない相手ではあるが、今は状況が状況しかたがない。

「夜分遅くにすみません。私、道に迷ってしまったんです。ここが何処なのか教えてくれませんか？」

なるべく下手に出て、早く必要な情報を得てここから離れましょう。

「あなた。幻想郷の人間ではないわね。格好から見ると外来人？」

「外来人とは何ですか？」

「あなた何処から来たの？」

私の質問には答えず、むこうから新たな質問を浴びせられる。

ここで答えないと話が續かないのでしょうがないく向こうの質問に答える。

「澄百合学園の寮からです。気が付いたら森に居て其処から歩いてきました」

「やっぱりね。はあ。まったく面倒なことになったわ」

いきなり溜息をつかれ、そのまま本当に困ったような顔している。

「ちょっと待ってなさい」

そう言うで一瞬にしてその場から消えた。

「一体どうなっているのよ。訳が分からないことが多すぎるわ」

何が起こったのか全く分からない。

さっきまで其処居たはずの人間が唐突に一瞬にして消えた。

そんなことは起きるはずがないのに、それが自分の目の前で起きている。

「理解が出来ないわ」

「それは何が一体理解できないのかしら？」

またしても一瞬間の間に現れた女は私にそう聞く。

「何もかもですよ。一から十まで何もかも。全てが理解できないんですよ。あなたは何か知っているみたいですね。出来れば教えてくださいませんか？」

私は冷静さを欠かずにそう答える。

「安心しなさい。ちゃんと説明してあげるわ。その前に家の中に入ってくれないかしら？ そうすれば私が答えられる範囲でならあなたの質問に答えてあげる事は出来るけどどうする？ 別にあなたここから出て行くのを私に止める権利はないからこの家から出て行っても何も文句を言う事はないわ。只、ここら辺にこの紅魔館以外に人間が住んでいる所はないわよ」

つまり、出て行くのは勝手だがここを出て行ったら情報も得られないと言う事ですか。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。

ここは賭けるしかないですか。

「それじゃあ家の中に招いてくださってありがとうございます。メイドさん」

「私は十六夜咲夜。あなたは？」

「私は萩原子荻です」

「そうですか。それじゃあ、萩原さん。ようこそ紅魔館へ」

そう言い咲夜さんは家の中に入って行った。

私もそれに続くようにして家の中に入っていた。

3幕 「策士とメイド」(後書き)

まだまだ長く続けるのは無理みたいです。

今はこの長さが限界です。

澄百合学園の他の面々もこの後に出していきたいと思いますが、3幕の主人公は萩原子荻です。

それでは感想とリクエスト待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0225m/>

東方戯言記

2010年12月12日22時49分発行